

市民情報センター・ゆうき図書館開館5周年記念事業

平成20年度

第1回新川和江賞

～未来をひらく詩のコンクール～

表彰式・講演会

と き:平成21年2月14日(土)

ところ:結城市民情報センター3階多目的ホール

ごあいさつ

平成21年の輝かしい年に新川先生をお迎えして『第1回 新川和江賞 未来をひらく詩のコンクール』表彰式を開催するにあたりまして、主催者としてひとことごあいさつ申し上げます。

この詩のコンクールは、市民情報センターとゆうき図書館の開館5周年を記念する事業として、また、『詩』の創作を通じて、本市の文芸振興を図り、創造性豊かな青少年の育成に寄与すること、そして、郷土の新たな才能を発掘することを目的に、新川先生の深いご理解とご支援をいただいて『新川和江賞』を創設したものであります。

市内在学、在住の小・中・高校生を対象に募集をいたしましたところ、597点もの多くの作品のご応募をいただきました。

これもひとえに関係者の皆様の深いご理解と詩を愛する気持ちの賜と感謝いたしております。

ご応募いただきました作品はいずれも力作ぞろいで、選考には大変難航したと伺っております。まずは、受賞されました皆様には心よりお祝い申し上げます。

同時に、今後ますます詩に関心を持たれ、心に残るような作品を生み出していかれますことを期待しております。

なお、今回は残念ながら選にもれた方々も大勢いらっしゃいますが、次回は、受賞されることを願っております。

最後に、来年度の『新川和江賞 未来をひらく詩のコンクール』にも数多くの作品が寄せられることをお願いいたしまして、主催者からのあいさつとさせていただきます。

平成21年2月14日

結城市長 小西 栄造

同じ山を眺め、同じ風に吹かれて

旧制の女学生だった頃の私は、ふるさとの絹川村から旧結城町へと、ひらがなの〈し〉の字のようなやさしいカーブを描く県道を、てくてく歩いて、現在の結城第二高等学校に通っていました。半世紀いじょうも歳月が流れ、しずかだった町も都市として大きな発展をとげ、世界じゅうの情報が、いながらにしてキャッチできる、新しい時代になりました。

しかし、どのように時代が変わろうとも、結城市に生まれ、結城市に育つ小中高生の皆さんは、あの頃の私と同じように、東の空にそびえ立つ紫の筑波の峯を朝夕眺め、冬は刺すような冷たい日光おろしに真向いながら、通学していらっしやるのにちがいないのです。

目をつぶると、皆さんの群像の中に、子供だった頃、女学生だった頃の私が、チラチラ交じって見えてきます。なつかしい思いがお湯のように湧いてきて、胸をあたたかくしてくれます。

本年度からスタートした〈未来をひらく詩のコンクール〉の賞に、私の名を冠して頂いておりますのは、^{おもは}面映ゆいかぎりなのですが、それだけに重い責任も感じます。

皆さんからお寄せ頂いた作品は、^{なおよ}けっして等閑にせず、おひとりおひとりと語り合うきもちで、読ませて頂きます。早くも第一回から、全国規模の詩のコンクールの入賞作品に、まさるとも劣らない詩が集り、関係者一同、大感激をしております。あつくお礼を申し上げ、今後ともよろしくお力添えのほどをお願いいたしまして、創設のご挨拶とさせていただきます。

平成21年2月14日

新川 和子

次 第

●オープニングセレモニー

新川和江氏作品 「花の名」の群読

●第1部 表彰式

1 開 会

2 主催者あいさつ

3 来賓あいさつ

4 表 彰

5 作品朗読 新川和江賞 1名
優 秀 賞 9名

●第2部 講演会

講 師 新川 和江 氏（ゆうき図書館名誉館長）

演 題 未来をひらく子どもたちに

●受賞者氏名

☆新川和江賞（最優秀賞）

あまいみをならしてね

山川小学校2年

えびさわ まさき
海老澤 匡希

☆優 秀 賞

しろあと公園のこい

結城小学校3年

みやもと あやな
宮本 彩名

あさがお

江川北小学校3年

よしかわ なな
吉川 奈那

ごはん

江川北小学校4年

なかやま なごみ
中山 和

自転車

結城中学校3年

まつもと ゆうき
松本 祐樹

おたまじゃくしのワルツ

結城東中学校1年

こまつ しおり
小松 詩織

すいませんでした

結城南中学校1年

よねだ ひとし
米田 仁志

お客さん

結城第二高等学校1年

みうら そうふうね
三浦 草風音

おといろ
音色

結城第二高等学校1年

おいぬま あゆみ
生沼 歩美

森

結城第二高等学校2年

わたなべ なおと
渡辺 直人

☆優良賞

なないろのにじ

結城小学校1年

ふじぬき まほ
藤貫 真帆

おじいちゃんの思い出

結城小学校3年

いとう ひろと
伊藤 大翔

わたしの顔

結城小学校3年

まなか ちあき
真中 千明

わたし

城南小学校1年

しもじょう ゆな
下条 結菜

ゆうひ

城南小学校1年

にいの たかのり
新野 孝典

わたしがおおきくなっても

城南小学校1年

いづか ちひろ
飯塚 千尋

くもの上って

城南小学校2年

のむら もとき
野村 基

本

城南小学校4年

いのうえ たまお
井上 珠緒

空の上で

城南小学校4年

せきぐち りか
関口 璃風

魚になったぼく

城南小学校5年

のむら つばさ
野村 翼

雨のにおい

江川北小学校4年

とおい いくみ
遠井 育海

雲と海

江川北小学校4年

ひらさわ いおな
平澤 いろは

夏の一日

山川小学校3年

えびさわ ともよ
海老澤 朋代

いもうとの音

山川小学校6年

あかおぎ まなみ
赤荻 愛海

まっすぐな風

結城中学校1年

なかはら かずや
中原 和也

春の矢

結城中学校1年

やまざき ゆか
山崎 由佳

心の洗濯

結城中学校2年

すわ ともみ
諏訪 智美

彷徨う思い

結城中学校2年

うえの みさと
上野 未恵

夢

結城中学校3年

うじいえ まりの
氏家 麻理乃

春に舞う花びら

結城中学校3年

ほしの さくら
星野 さくら

海

結城東中学校1年

こばやし ゆい
小林 佑衣

空

結城南中学校1年

わだ マリコ
和田 マリコ

雲が流れていくように

結城南中学校2年

くろかわ るみ
黒川 瑠美

空白

結城第二高等学校3年

やまくち ゆか
山口 柚香

強くなれるから

結城第二高等学校3年

すすき ちさと
鈴木 智沙都

夢 つむぐ

栃木高等学校2年

こばやし こうすけ
小林 宏輔

☆新川和江賞（最優秀賞）受賞作品

あまいみをならしてね

山川小学校二年 えびさわ まなみ

わたしがそだてる、
はじめての、おやさいさん。
ミニトマトさん、こんにちわ。
はじめてだからしんぱいだけど、
毎日のお水あげは、わすれないよ。
わたしのうきうきな朝。
元気にそだってね、早く大きくなってね。
ちくちくして、くしゃくしゃなはっぱ
水あそびして気もちよさそっだね。
のびのびそだって、お花がさいたよ。
しモン色、ほしのかたち。
とてもきれい、わたしはワクワク。
花がかれたあと、小さな小さなまあるいみ。
すすすすすすすすすすすす
ふふふふふふふふふふふふ
黄みどり色、のびのびなミニトマトさん。

早くみんなに、食べてほしいから、
早く、赤く、赤く、なってね。
朝のお水るときは、まだ、オレンジ。
お風には、赤くなったよ。
お日さまあびて、まっ赤だよ。
やったね。シャンプしてうきうき。
一ばん目は、パパにあげたよ。
お口の中でプチッてなったよ。
とてもあまくて、おいしいよって。
ミニトマトさん、百てんまん点。
ミニトマトさん、ありがう。

✿新川和江氏短評

葉っぱにさわった感じや、星のかたちをした花、少しずつ
くらくらと、色づいてゆへ様子、パパにあげたさくらしよの実が、
パパのお口の中でプチッと鳴るといふは、観察がこまやか
で、表現が感覚的。作者のオマケはからでなへ、読者も、
うきうきワクワクしてへる、うわしい詩です。

つりあじ公園のこいし

結城小学校三年 宮本 あや名

池を見ついたら
こいしがあやなみ
水面がゆれる
すいすい
きりぎり

はしをわたれば
赤いこいし
はしのかげを
すいすい
ぴちゃぴちゃ

日なたに出たら
水面がきらきら
ほう石のようにかがやっていた

池を見ついたら
こいしがあやなみ。

✿新川和江氏短評

光る水や、きれいな鯉のおまへがうすが、リズムカルにうたい
出なれていきます。よけいな言葉を使わずに、「池を見ついたら」と
こいしかなかなかこいしをうたいついでにうたいついでにうた
が感じられます。

あやがお

江川北小学校三年 吉川 なな

あやがおは、
くぐぐぐのびり
まきこいし
庭のせむしをだまこめた。
くぐぐぐだまこめい、
やせこいし花をせむしに見せた。
せむしの木は、
「きわいだね。」
こいしこいしだよ。
夏がすぎ、しめだる風がくぐぐぐ
「まだくぐね。」
こいしこいし
小さなだねをおこしたよ。

✿新川和江氏短評

あやがおだまこめられた、せむしの木は、うわいかったて
まじだね。季節がちがうのびり、せむしの木は自分の花をあやがお
見せつあやがおのなごのなごをなだたつたこいしだよ。あや
この四行も、こいしこいしと胸にこいし、美しき詩句です。

ごはん

江川北小学校四年 中山 和

知っているかい

一つぶのお米に、

七人の神様がいるということ。

みんなは、毎日、何千人何万人の、

神様を食べて元気に育っていくのだよ。

知っているかい

作る人が愛じょうをこめて、

料理を作っていることを。

みんなは、毎日、愛じょうのこもった

おかずを食べてやさしい人に

育っていくのだよ

✽新川和江氏短評

おばあちゃまからでも、お聞きになったのでしょうか。一つぶのお米に七人の神様がやどっているというお話、とても尊たっとい教えですね。この詩を読んでから私も、ごはんの時に、七人の神様のお話を、思い出すようになった。一連だけでも、りっぱな詩です。

自転車

結城中学校三年 松本 祐樹

今日もまた僕は君にこがれる

今日もまた僕は君を乗せる働き者

青信号僕は休まず働き続ける

赤信号ちよっぴり休憩かなあ

君が急げば急ぐほど僕も忙しい

君がのんびりすれば僕ものんびり

時には顔に犬の糞がつく

顔が傷ついたって

顔が汚れたって

僕は君の行き先に向かって働き続ける

僕は年中無休の働き者

今日も働く

明日も働く

僕は年中無休の働き者

君をのせて

✽新川和江氏短評

毎日深い考えもなしに乗り回している自転車が、じつは、こんなことを思っているの知ったら、「自転車くん、ご苦労さな」と、声をかけずにはいらねえななりますね。

ほかの物になり代わってうたうたのこころをみる松本くんは、優しい心の持ち主であるばかりでなく、詩の書き手としても、豊かな技術をお持ちです。

おたまじゃくしのワルツ

結城東中学校一年 小松 詩織

私の楽符の五線符の上で
おたまじゃくしが
おどってる

とんだり
はねたり
まわったり
ときにはちよっと一休み

一匹二匹三四匹
あちらこちらに
ちらばって
あちらこちらを
いったりきたり

うれしく楽しくおどったり
スキップしながらおどったり
明るく元気におどったり
心をこめておどります
みんなの心が一つになれば
すてきな歌が生まれます

✿新川和江氏短評

音符をおたまじゃくしに見立てるのは、古くから使われている
比喩で、新鮮味に欠けるうらみがありますが、仕上げは上。ピ
アノがなくても、詩の行間から、楽しい調べがきこえてきこえる
作品になっています。

小松さんは、作曲もなみりそのうな感じを受けました。

すいませんでした

結城南中学校一年 米田 仁志

色々燃やして
車に乗って
花火して
エアコンつけて
二酸化炭素出して
空気をよこし

きたない水流して
ポイ捨てして
川と海をよこし

木を切って
森を消し
森林を減らした

地球に
すいませんでした

✿新川和江氏短評

世界が抱えている環境問題を淡淡とした口ぶりだけでだけ批判
できるのは、なかなかの腕前。「すいませんでした」と、野球帽を
とってピョコンと頭を下げたような謝りの方が、地球を小馬鹿にし
たようにも見えますが、かえって米田さんの、ほんとうの気持ち
が表れているように、私は感じました。

お客さん

結城第二高等学校一年 三浦 草風音

お客さん お客さん
今日も来たんですね
いつもいつの間にか来ていて
私が気づいたときには
あなたはいつもの場所であ
うとうと うとうと…
お疲れのようです。

お客さん お客さん
去年の今頃も
あなたがここに来たのを
私 覚えてるんですよ
窓の上に垂れ下がった
一本のケーブルの上に
やって来たのを。

お客さん お客さん
小さな青ガエルの お客さん
最近
あなたの姿を見かけませんが
別の家でも 見つけたのでしょ
うか
それとも 冬眠したのでしょうか
あるいは……

来年も 気が向いたら来てくだ
さい
誰も乗っていない
ただ垂れ下がったケーブルが
さびしそうなので…

※新川和江氏短評

「お客さん お客さん」と各連で呼びかけておられるので、ど
んなお客さんかと思いましたが、小さな青ガエルさんだったので
すね。気さくで、のんびりしていて、青ガエルでなくても、ど
んなお方がお住まいなのかと、ちょっとお窓をのぞいてみたくなる
詩です。

音色 おといろ

結城第二高等学校一年 生沼 歩美

私の曲は、まだ終わりが見えない。
音や音色はさまざまだけど、
一つ一つの音符は意味を持ち、
光を放っている。

曲の途中、曲調が変わることがある。

速くなったり、遅くなったり、
鋭くなったり、穏やかになったり、
私には予想もつかない。

いろんな楽器が加わり
一緒に曲を奏でてくれる。

私がどんなことを考えていても、
思っている音はテンポを刻み続ける。

そして曲は日々変化していく。
途中に、休符を入れながら。

※新川和江氏短評

普通、音色、音色と読みますが、特に音色とリズムを振っているのは音
楽について書いているのではなくて、生活さんの日々の生活方、感情の動
きを、ひとつの曲に込めて表現しようとなっていて、なかなかうまい。
そう、ときどき休符を入れないと、疲れてしまいますものね。

森

結城第二高等学校二年 渡辺 直人

僕の目には、葉っぱが見える

それはおどっている

光がゆれている

すきまから、枝の、木々の間から

光がこぼれおちている

森の地面は

落ち葉の数だけ

光でうまっている

一本の大木がみおろす

太陽もまた

僕を、僕の間を見つめていた

※新川和江氏短評

しんとした、森においがしてきそうな感覚的な詩です。渡辺さんは、小さい時から、ひとりで森歩きをするのが好きな少年だったのではありませんか。たどたどしい行も無くはないのですが、するどい感覚がいたる所にひらめいていて、この詩境を深めて行ってほしい、いい詩がお書きになられる人だ、と思いました。

☆優良賞受賞作品

なないろのにじ

結城小学校一年 ふじぬき まほ

にじをみたよ。
はじめてみたよ。
ままのせなかこのって。
おおきなそらじ、
あおいそらじ、
いろいろないろの、
きれいなにじをみたよ。
きえないで、
ずっとみていたいのに。
三さいのたんじょうび、
わたしは、
にじをはじめてみたよ。
いまでもわすれない。
さいごうのプレゼント。
またみたいよ、
なないろのにじを。

おじいちゃんの思い出

結城小学校三年 伊藤 大翔

この葉からほろりとおちた
ほくの思い出は
遠い空の上
遠い空の上
大好きなおじいちゃん
いっぱい遊んだね
自転車もったね
おこすかいももったね
おこった顔はこわかったけど
歯がぜんぜんなくて
かわいいおじいちゃん
おそう式の時
目をつぶると
数々の思い出が
メリーゴーランドのようにまわっていた
おじいちゃん笑顔が
にじんではきえ
にじんではきえ
ほくの指の間から
すべりおちた

おじいちゃんメッセージをおくります
勉強がんばります
友達となかよくします
空手もがんばります
家のおてつだいもします

遠い空の上の
遠い空の上の
おじいちゃん
さようならではなく
あのがとう

わたしの顔

結城小学校三年 真中 千明

わたしの顔の太いまゆ毛は
お父さんになっている
わたしのひとえのまぶたは
お母さんになっている。
わたしの鼻は、
お姉ちゃんになっている。
わたしの顔の大きな前歯は、
ひーおばあちゃんにそっくり。
みんなにしているわたしの顔
大好きなかぞくにもらった
わたしの顔
大きくなったら、わたしにしている
かぞくがぶえるのかな
たくさんぶえるのがうれしいな。

わたし

城南小学校一年 しもじょう ゆな

わたしのなみだは、きにかわる
そして、みんながみてくれる
わたしのなみだは、みにかわる
そして、みんながみてくれる
わたしのなみだは、みずにかわる
そして、みんながみてくれる
わたしのなみだは、つぼみにかわる
そして、みんながみてくれる
わたしのなみだは、さくらにかわる
そして、みんながみてくれる

ゆうひ

城南小学校一年 にいの たかのり

ゆうひが
うみにしずむのをみたよ
まあるくて
おおきなゆうひだったよ
あかいろが
うみにうつって
きらきらひかっていたよ
ゆうひのゆうひ
うみのゆうひ
しずんでいくのを
ずっとみていたんだ
ほくもいっしょに
うみのゆうひ
いってみたいな

わたしがおおきくなっても

城南小学校一年 いいつか ちひろ

くもの上って

城南小学校二年 野村 基

本

城南小学校四年 井上 珠緒

わたしがおおきくなっても

いまみたいながいい

みんないっしょで

みんなわらって

しんせんでおいしいたべものを

かわらずたべていたい

きれいなみずと

きれいなくつき

げんきなちきゅうと

ずっといっしょにくらしたい

いつもぼくは、くもの上には

なにがあるのだろうかと思う

人がいるのかな

どうぶつがいるのかな

その答えをたしかめに

ぼくは、ひこうきにのった

人が小さくなる

いえが小さくなる

海にはかいぞくせんかな

そしてくもの上にきた

なにもない

ずっとつづくふわふわのくも

わたあめみたいなくも

のれるのかな

ここにはすめないな

やっぱりぼくは

下から見ているへもが

いちばんいいな

わたしは本

とつてももの知り

でもなかなかみんな読んでくれない

悲しいな

さみしいな

ねえ読んでみて

読んでくれたら

うれしいな

きっと友達になれる

わたしはいつでも

君の心の大切な一ページになる

君の頭の中 心の中にそーっと入って

ずーっといっしょにいたいんだ

空の上で

城南小学校四年 関口 璃風

今日もみてる
明日もみてる
これからもずっとあの空の上で見えていてく
れるかな
やさしい笑顔で
時にはちょっとこわい顔で
あの時は悲しかった
もっとお話したかった
時にはしかってほしかった
ずっと名前をよんでほしかった
でも今はちがう
楽しい時には笑ってくれる
悲しい時にはなぐさめてくれる
なぜかそんな気がして安心する
きつとあの空の上から私を見守ってくれて
いるのかな
天国のひいばあちゃん

魚になったぼく

城南小学校五年 野村 翼

ぼくは、初めて海の中をのぞいた
水族館にいるような魚たち
名前は分からないけど
青や黄色の小さな魚
そしてはい色の大きな魚
青いヒトテヤナマコ
手にふれるとすばやくにげた
かたかったりザラザラしていたり
たくさん水草に囲まれて
ぼくは魚になった
気持ちよさそうに
自由にのんびりと
泳いでいる魚たち
どねくらい魚と遊んでいたのだろう
海の中はキラキラと
かがやきながら
どじまでもどじまでも
続いていた

雨のおい

江川北小学校四年 遠井 育海

外に出ると
ふしぎなおい
雨のおいだ
ふわっとしていて
スカッとしている
ほごりのにおいかな
かさがなくて
走っていった時の
気持ちが伝わる
雨のおい
ふしぎなおい

雲と海

江川北小学校四年 平澤 いおな

夏の一日

山川小学校三年 海老澤 朋代

朝の登校をしていると

雲からタツノオトシゴが

出てきたよ。

もくもく もくもく

雲は動いてタツノオトシゴが

きえちゃった。

体育の時間空を見てたら

雲からえびが

出てきたよ。

もくもく もくもく

雲は動いてえびが

きえちゃった。

ああ おもしろい

空が海になったみたいだ。

お早う、朝だよ。サンダルはいて、

表へ出たら、大きくいきをすうよ。

空気はとても、きれいなかんじ。

すきとおっているかんじかな。

ひんやりとして、すずしいな。

早くごはんを、すませよう。

早くしゅくだいすませよう。

だんだん日ざしが、強くなる。

開けたまどから、せみの声。

だんだん、だんだん、ふえてくる。

お昼のころには、大合しよう。

よけいにあつくて、力がぬけるよ

さあ水あびは、お楽しみ。

つめたくなって、チャプチャプ。

気もちがいいね。

さっぱりして、お風ははん、おいしいね。

お庭をおさん歩。うら庭の草の所。

ぴよんぴよん小さなかえるたち。

たくさんはねて、こげてくみ。

お空を見たら、真っ白。大きなもくもく。

こんにちは。本当にあついね。

おやつを食へよう。あまいのが大すき。

風がでてきたよ。すずしくなってる。

黒い雲、こっちへきたよ

雨がザーザーふってきよ、

かみなりもなる、ごろ、ぴか、びじん。

少しドキドキ、こわいな。

夜にはすっかり、雨止んで、

まんまるお月さまこんばんは。

みんな、みんな、おやすみなさい。

いもじいの音

山川小学校六年 赤荻 愛海

一番下のいもじいは
お気に入りのサンダルをはく
キュッキュッと
音が出るサンダルだ
近くにいる時はもちろん
遠くにおいても妹の事がわかる
走ってくると
キュッキュッの音が早くなる
その音がなくなる時がある
ころんだのだ
だけども妹は
「泣かなかったよ」って言って
またキュッキュッとならして
歩きはじめる
とってもかわい
いもじいの音だ

まっすくな風

結城中学校一年 中原 和也

僕は柔道部に入った
心を強くしたいから
体を強くしたいから
友達より体重があるから
簡単に投げ飛ばされないと
思うから
なのに
今、僕は投げ飛ばされている
体が宙に舞っている
まるでスローモーションのよう
だ
なぜ、体が小さい相手なのに
なぜ、僕に恐怖心があるから
なぜ、僕に隙があるから
僕の体を風が貫く
僕の隙をまっすく貫く
いつか僕も手に入りたい
相手の隙を貫く
まっすくな風を

春の矢

結城中学校一年 山崎 由佳

春が来た
皆、土の中からおいだされ
まだまだ重たい体を
のっそりのっそり
動かしながら
歩きだす
目に差しこんでくる
春の光の矢が痛い
ふもとからは
祭りの太鼓が鳴りひびく
空は快晴
私は歩きだす
強く深く前へと
まっすくに
春の光の矢の中を

心の洗濯

結城中学校二年 諏訪 智美

誰もがみんな
心の中に
色のついていない服がある
優しい気持ちになったとき
服はほんのり桃色に
楽しい気持ちになったとき
服はぱあっと黄色になる
悲しくてどうしようもないとき
服はくすんだ青色になる
くすんでてきれいだと思えない色
怒って怒りがおさまらないとき
服はちょこっと破けてて
真っ赤っかになってしまっ
そんなときは洗濯しよう
でも無理やり色を落とそうとして
ごしごし洗ったら穴があいちゃう
だから優しく洗うんだ
涙という名の洗剤水で
きれいさっぱり色を落とす
何もかも真っ白にね

彷徨う思い

結城中学校二年 上野 未恵

これからは いっそ笑おうよ
私はもう 一人なんかじゃないんだ
「心のバリアなんていらないよ」
あの日に降った氷雨 寒かったよ
人間嫌いになって 一人ぼっちになって
何もかも うんざりだった
私が君に出会わなかったら
きつと
この劣等感に溺れていた
だから 伝えたいことは「ありがとう」
全部 思い詰めなくていいんだよ
辛いって言えばいいのに
私は一人 頑張ってしまう
それを助けてくれた君は 教えてくれた
絆という 大切なことを

私の居場所は 心のずっと奥
踞^{うすくま}って 静かに泣いてた時もあった
自分で立ち上がって
歩いて行かないといけな
君の力を借りずに 一人で
二度と繰り返さない 私自身の過ち
君に出会い 嫌いな人の温かさを
心で 感情で
触れることができた
生きることば辛いけど もう一度
歩いて行こう

夢

結城中学校三年 氏家 麻里乃

そら 大きな空

空には一体何がある

空にはたくさん色がある

天気や時間、季節によって色が違う

空は不思議なパレットだ

空には一体何がある

空にはいっぱい鳥がいる

一羽で気持ちよく飛んでいるのがいれば

みんなで仲良く飛びのもいる

空には鳥が住んでいる

空には一体何がある

空にはいっぱい星がある

風間は全然見えなけれど

みんなが寝ている間に

一生懸命光ってる

空にはいっぱい星がある

空には一体何がある

空にはきつと心がある

空のようして 私はなりたい

春に舞う花びら

結城中学校三年 星野 さくら

春の道にちらちら

舞う花びら

風に吹かれて

遠くへ 遠くへ

どこまでも行くよ

それを私は おっってみるの

その先に何があるのだらう

素敵なこと それとも その逆かも

私には分からない

でも行ってみるの

きつと素敵なのがあると信じて

春の道にちらちら

舞う花びら

風に吹かれて

遠くへ 遠くへ

どこまでも行くよ

海

結城東中学校一年 小林 佑衣

きらきら かがやく

真っ赤な夕日にてらされて

一心に かがやく

海辺で遊ぶ子どもたち

小さくきらめく砂

波の音 貝がら

すべてが 海の光に反射して

美しく かがやいている

この地球という世界に

永遠につづく海

むだな命なんて

一つもないんだって

教えてくれている

それは

だれもが

自分自身で

かがやけるということ

あの海のように

空

結城南中学校一年 和田 マリコ

泣きたいときは

空をみて

空も一緒に泣いてくれるよ

ほら雨が降ってきた

雨のあとには

虹が出るように

泣いたあとは

きっと笑えるから

さみしいときは

空をみて

ほら星たちがいるでしょ

君は一人じゃないよって

一緒にいてくれるよ

困ったときは

空をみて

曇り空に相談してみな

一緒に考えてくれるから

曇り空が晴れたとき

君の悩みもきっと

なくなっているよ

空をみて

どんな時も

上をむいたら空がある

忘れないで

いつも空が君を見守っているんだよ

どこにいても

そこには空がある

雲が流れていくように

結城南中学校二年 黒川 瑠美

雲はどうして流れていくんだろう

自分で決めた道を

ただまっすぐに流れていく

そうやって雲は素直だから

きっと美しく見えるんだろう

人の気持ちを雲みたいにな

まっすぐつき通せればいいのにな

雲が空を泳ぐように

嬉しかったら喜んで

雲が雨を降らすように

悲しかったら泣いて

雲が私たちを包み込むように

楽しかったら笑って

そんなふうに

今を素直に生きていこう

嬉しいのに、悲しいのに、楽しいのに

それをいつわっていたって

絶対つまんない

雲になれなんて言っていないし

迷ったっていいんだよ

人はそうして成長していくのだから

でもきっと、雲のようになれたら

どこまでもまっすぐ

前を向いて

未来に向かって

生きていけるんだろうな

空白

結城第二高等学校三年 山口 柚香

形を抱きしめて私は叫んだ
器はただ萎んでいった
なんだろう

穴なんか空いていないのに

泣き叫んだそれは形になってくれなかった

自由を望む私の心と

居場所を探すこの足が

ちょうど良いバランスさえ保ってくれば
私に欠ける物なんて初めから無かったんだ

記憶を挿んだ私は喜んだ

沢山の思い出に囲まれて、

私は幸せに酔いしれ

今日を思うところの心はなんだか折れてしま
い
そついで

ちっぽけだと私に言い聞かせる泣き声で、

私は夢から目覚めるのです。

強くなれるから

結城第二高等学校三年 鈴木 智沙都

自分だけ

なんて思わないで

みんなそれぞれ悩み抱えて生きてる

悩みがあることは

嫌なことだと思わないで

幸せなことなんだよ

自分自身 強くさせ

人の思いやりを考えられる

自分が成長できる場なんだ

もし挫けそうになっても

自分に負けないで！

立ち上がって！

その分自分自身

強くなれるから

夢 つむぐ

栃木高等学校二年 小林 宏輔

お月さま あせかいてるね

小さな僕が そこにいた

汗 涙 のこる悔しさ

生きることになまけたくなってしまう

汗 笑顔 あふれる喜び

まっすぐ生きていくことに 自信がわく

中途半端な 今の僕

でも でも ちっぽけだけど 夢がある

この緑の大地で

夢を ひとおり

この緑の大地から

夢を ひとおり

ひとつの空の下

時は ひろがる

ひとつの空の下

夢を つむぐ

こつこつと輝く月のまじ

大きな僕で そこにいよう

